

ヒツジ以前・ヒツジ以後

ヨルダン内陸部における沙漠観・ステップ観の変遷

Before Sheep, After Sheep: Transition of the Desert and Steppe View in Inland Jordan

藤井純夫

Sumio FUJII

金沢大学文学部

Faculty of Letters, Kanazawa University

This research project aimed at tracing the transition in the desert and steppe view in inland Jordan, focusing on the diachronic shift in land use from the last hunter-gathers to early pastoralists. The excavation at Qa' Abu Tulayha West, along with the general survey around this site, has suggested that the establishment of nomadic pastoralism in inland Jordan probably in the latter half of the 6th millennium B.C. brought about the marked decrease in the opportunity of seasonal expedition of sedentary populations, which in turn led to the negative view of the desert and steppe world - another dimension of the Near East.

1. 研究目的

紀元前6000年頃に進行したヒツジの家畜化は、「肥沃な三日月弧 (fertile crescent)」の内側に逼塞していたヒトの居住域を、その外側のステップや沙漠にまで大きく拡大した。乾燥地適応型の家畜の導入が、ヒトの適応様式を多様化した結果と言えるであろう。しかしこの新たな適応は、ヒトの持つ沙漠観・ステップ観自体の変質をも導いたに違いない。この変質の過程を、考古学的データによってより具体的に追尾しようというのが、本研究のねらいである。

調査のフィールドには、ヨルダン内陸部のアル・ジャフル盆地 (al-Jafr) を選択した。この盆地に点在する初期遊牧民遺跡の発掘・分布調査を通して、1) ステップ・沙漠の「ヒツジ化」の過程を追尾すること、2) これに伴う土地利用形態の変化を辿ること、3) これらに起因する沙漠観・ステップ観自体の変質を明らかにすること—この3つを、調査の具体的な課題とした。以下はその概要報告である。

2. 研究経過

1998年8~9月および1999年8~9月の二シーズンにわたって、カア・アブ・トレイハ西遺跡 (Qa' Abu Tulayha West) を発掘調査した。その結果、この遺跡の第4層 (後期新石器時代) および第3層 (前期青銅器時代) で、「ヒツジ化」のプロセスを追尾するための良質な考古学的データを得た (Fujii 1999a, 1999b, 2000a, 2000b)。

これと並行して、周辺地域の遺跡分布調査を実施した。合計十数件の遺跡を確認し、初期遊牧民の土地利用形態に関する基礎的なデータを収集した。併せ

て、現地遊牧民に対する聞き取り調査も実施し、キャンプ地選定の判断基準や水場との関係などについて、民族学的データを収集した。

3. 研究成果

3.1 「ヒツジ化」のプロセス

ヨルダン内陸部の「ヒツジ化」のプロセスについて、ヒツジの側 (出土動物骨の分析) およびヒトの側 (家畜囲いの分析) の二つの側面から、先行研究を含

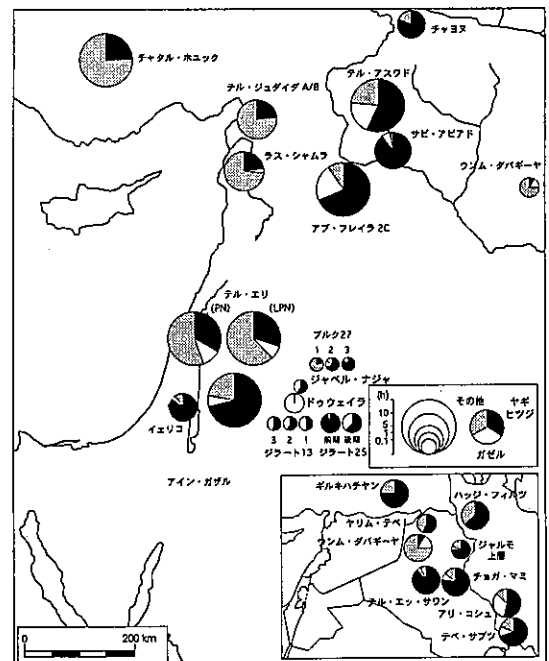


図1. 動物骨に見る「ヒツジ化」の経緯 (藤井1999aより)

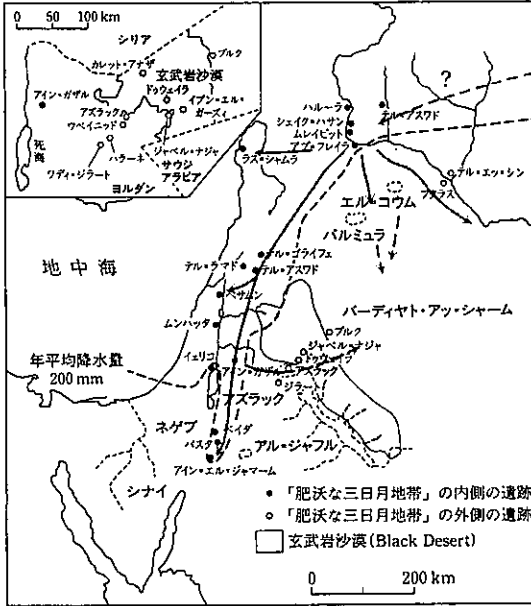


図2. ステップ・沙漠の「ヒツジ化」(藤井1998より)

めた包括的な検討を行った。その結果、ヨルダン内陸部ステップ・砂漠地帯の「ヒツジ化」の経緯について、おおよそのアウトラインを描くことができた(藤井1998)。つまり、1) ヒツジの家畜化は、紀元前6500~6000年頃のシリア北部~アナトリア東南部で成立した、2) この家畜化は、あくまでも農耕集落の内部で進行した定着した(つまり非遊牧的な)家畜化であった、3) 家畜種のヒツジは、これよりも数百年遅れてヨルダン方面の農耕集落に伝播した、4) ヨルダン内陸部の「ヒツジ化」は、これらの農耕集落を起点とする新たな遊牧的適応と考えられる、5) その年代は、紀元前5500~5000年頃と同定される、などの点が明らかとなった(図1-3)。また、6) 当初からヤギをある程度交えた群れが形成されていたこと、7) 消費パターンから見て、遊牧の初期段階では肉利用が中心であり、乳の加工利用は低調であったこと、8) 初期遊牧民が狩猟も併用していたこと、なども(部分的にはあるが)明らかになった。

3.2 土地利用形態の変遷

ヒツジ以前： 調査の対象となった遺跡がいずれもヒツジ化の途上またはヒツジ以後に相当する遺跡であったため、この点についての考察は、先行研究の比較・再検討という形で進められた。その結果、1) ヒツジ以前のステップ・沙漠世界が、ガゼル(Gazella)を対象とする季節的な狩猟・採集経済圏であったこと(ステップ・沙漠への季節的な介入)、2) ガゼルの狩猟は、大規模な追い込み猟施設(kite site)を用いた組織的狩猟であったこと(大型集団としての季節

b.c.	レヴァント地方の紀年	生業形態	レヴァント	ザグロス
6,000	土器新石器文化	(遊牧的牧畜)	(ステップへの遊牧的適応)	
	(後期) 先土器新石器文化B	定着集落	家畜の成立	家畜の成立
7,000	(前期) 先土器新石器文化A	農耕狩猟	ヤギ	ヤギ・ヒツジ
			定着的農耕集落	定着的農耕集落
8,000			ガゼル	
9,000	(後期) ナトゥーフ文化	狩猟採集	(群れ単位の追い込み猟)	
10,000				ヤギ・ヒツジ
12,000	ジオメトリック・ケバラ文化			(群れへの適応?)
	ケバラ文化			

図3. 年表：「ヒツジ化」のプロセス(藤井1999aより)

的な沙漠居住)、3) 水場ではなく、むしろ丘陵端部への居住が中心であったこと(獲物の側に水場の優先権を与える方式)、などの点が明らかになった。

ヒツジ以後： ヒツジ以後の土地利用形態に関しては、カア・アブ・トレイハ西遺跡の発掘調査および周辺遺跡の分布調査が、具体的データを提供了。調査の結果、1) 都市・農村社会からの季節的介入ではなく、ステップ・沙漠圏内におけるヒツジ遊牧民としての自立的回遊が成立したこと(遊牧的次元の成立)、2) 居住の単位が家族を中心とするようになったこと(小規模集団による沙漠居住)、3) 水場の占有権をヒツジと共にヒトが独占するようになったこと、などの点が明らかとなった。この双方のデータを対比することによって、沙漠観・ステップ観の変遷を探るための糸口が得られた。

ところで、調査の過程で大きな問題となったのが、遊牧民居留地と農耕民集落との識別である。乾燥地で大型の遺跡が確認された場合、通常、後者に同定されることが多い。しかし、今回の発掘調査(民族班による比較資料の検討を含む)によって、カア・アブ・トレイハ西遺跡の第4層・第3層で確認された大型の集落が、実際には、遊牧民の一家族が反復居住する過程で累積・成長した「擬集落」であることが分かった(図4)。同一キャンプ地における毎年の住居更新によって、一見して農耕民の集落と見間違ふような規模の「擬集落」が形成されたわけであり、これを従来は農耕集落と見誤っていたのである。この「擬集落仮説(Pseudo-Settlement Hypothesis)」は国内外の学会で発表され(藤井2000, Fujii 2000c)、ステップ・沙漠地帯の遺跡に対する包括的な再検討を促したという点で、大きな評価を得た。

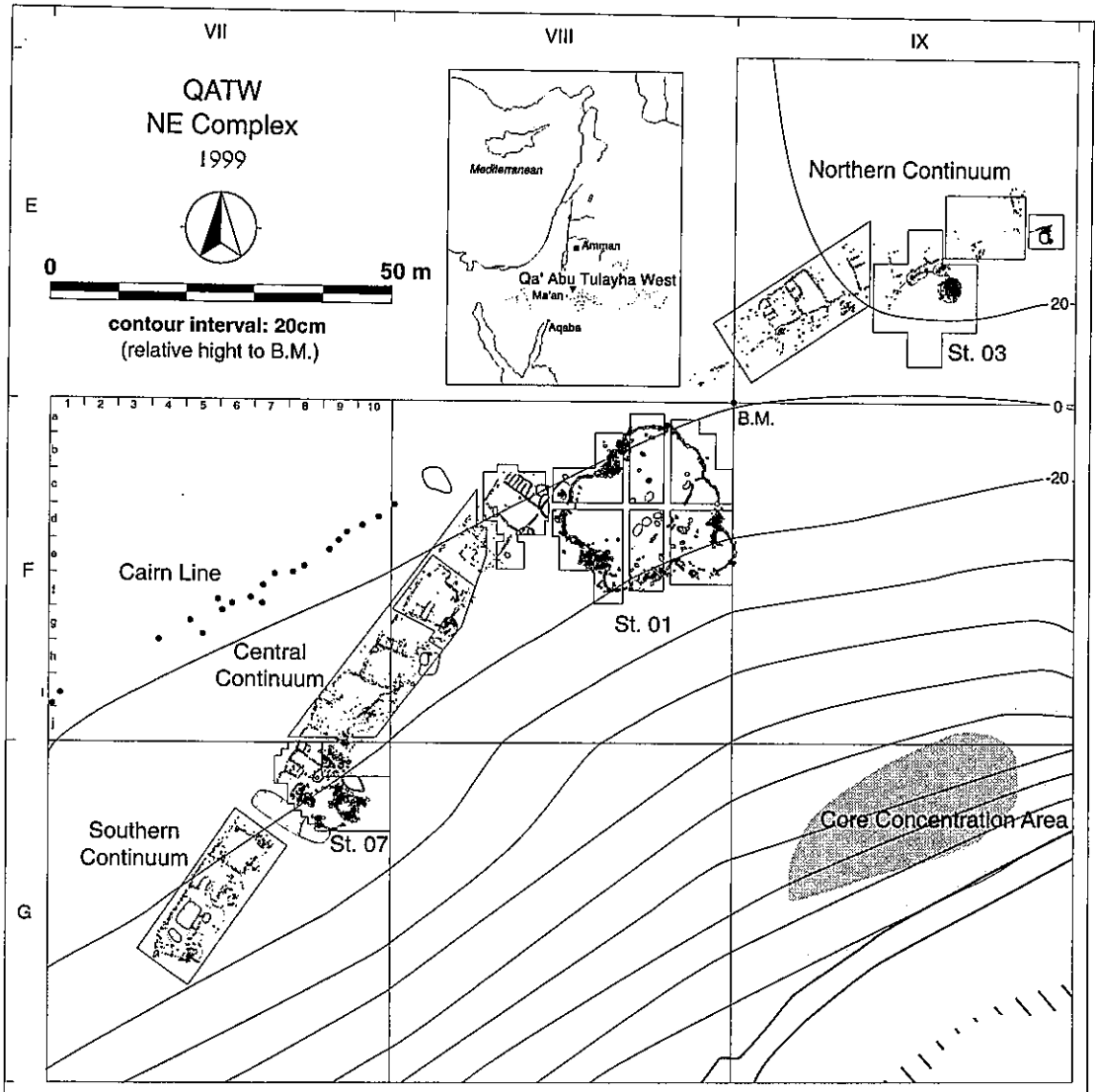


図4. カア・アブ・トレイハ西遺跡 (Fuji 2000a より)

3.3 ステップ・沙漠観の変遷

以上の基礎的データを基に、ヨルダン内陸部における沙漠観・ステップ観の変遷に関して、以下のような見通しを得た。

ヒツジ以前： ヒツジ以前の狩猟採集民にとって、沙漠・ステップ地帯は、季節的に利用するだけの、いわば「飛び地」的な存在であったと考えられる。しかし興味深いのは、そこでの逗留が、むしろ大型集団の形をとっていたことである。このことは、(彼らの本拠地である)都市・農村地帯の生活様式をそのまま持ち込んだ形での逗留が行われたということ、より正確に言う、本拠地と同一の生活様式を持ち込める局面においてのみ、実際の逗留が行われたということ、を意味しているように思われる。その意味でも、ヒツジ以前の沙漠・ステップは、都市・農村社会の側からの

「季節的介入の場」に過ぎなかったと言えるであろう。

しかし、水場を獲物の側に優先して与えた結果、丘陵端部への居住が中心となっていたことは、注目に値しよう。このような土地選択を要求するという点においては、ヒツジ以前の沙漠・ステップは都市・農村社会とはやや異質の世界を形成していたと言えるであろう。

ヒツジ以後： 沙漠・ステップの「ヒツジ化」は、その圏内での周期的な回遊を可能にした。つまり、遊牧民世界という、新たな次元の創設である。しかしそれは、都市・農村社会の側からすれば、自らに付属していた「季節的介入の場」の喪失に他ならない。この喪失感こそが、(主に都市・農村社会の内部で形作られてきた)否定的な沙漠観・ステップ観の一因と言えるであろう。

ところで、沙漠・ステップの「ヒツジ化」は、居住形態の面でも新たな変化を引き起こしていた。大型狩猟集団としての居住から、(おそらくは家族単位の) 牧畜小集団としての逗留へのシフト、がそれである。このこともまた、共同体社会(つまり都市・農村社会)との間に、新たな違和感を増幅したと考えられる。

一方、ヒツジ化以後の土地利用は、水場をヒトが占有する点に特徴があった。この点では、むしろ、都市・農村型の土地利用に接近したことになる。しかしこの接近がもたらしたのは、都市・農村社会の側からの「季節的介入の場」と「遊牧民による逗留の場」との、更なる競合である。競合の激化は、前者から「季節的介入の場」を更に剥奪する結果を生んだに違いない。このこともまた、(都市・農村社会から見た) 沙漠観・ステップ観の否定的側面の一因であろう。

4. 今後の課題と発展

第1の課題(ステップ・沙漠の「ヒツジ化」の過程)および第2の課題(これに伴う土地利用形態の変化)については、一定の見通しを得ることができた。

問題は、第三の課題(沙漠観・ステップ観の変遷)である。これについては、必ずしも十分な検討は加えられなかった。と言うのも、第1・第2の課題に関する基礎的データの収集・整理・分析に多大な時間を要し、それを統合・昇華するだけの十分な余裕を確保できなかったからである。また、そのための方法論にもやや不足があったからである。

今後の課題は、これらの難点を克服することに尽きる。幸い、文部省科学研究費による調査の継続が内定しているので、今回の研究を更に補充・発展させていきたい。

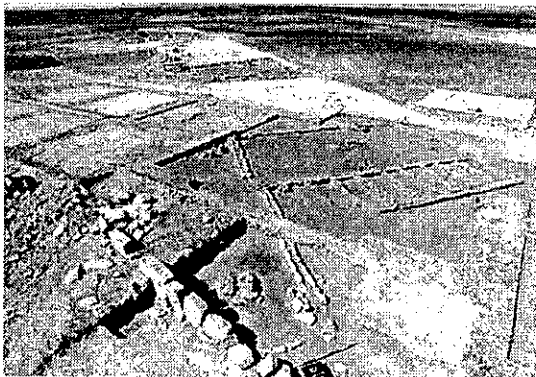


図3. カア・アブ・トレイハ西遺跡(Fujii 2000c より)

不備な点は多々残ったが、西アジア世界が内包するもう一つの次元(つまり、ステップ・沙漠の遊牧的次元)に関して考古学的研究の地歩を築いたという

点で、また、単なる記述型の考古学ではなく仮説検証型の考古学を試行し得たという点で、本研究の意義は決して小さくないものと確信している。

5. 発表論文リスト

■論文・著書

藤井純夫

- 1998 「肥沃な三日月地帯の外側：ヒツジ以前・以後の内陸部乾燥地帯」『岩波講座 世界歴史』2巻、97-124頁、岩波書店。
- 1999a 「群れ単位の家畜化説：西アジア考古学との照合」『民族学研究』64/1: 28-57.
- 1999b 「西アジア初期農耕の土地選択」『食糧生産社会の考古学』22-49頁、朝倉書店。
- 2000 「乾燥地考古学の諸問題：1. 遊牧民の考古学的可視性」『沙漠研究』(印刷中)。

Fujii, S.

- 1999a Qa' Abu Tulayha West: An Interim Report of the 1998 Season. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 43: 69-89).
- 1999b Qa' Abu Tulayha West. *American Journal of Archaeology* 103/3: 496-498.
- 2000a Qa' Abu Tulayha West: An Interim Report of the 1999 Season. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 44 (in print).
- 2000b Qa' Abu Tulayha West. *American Journal of Archaeology* 104/3 (forthcoming).
- 2000c The Pseudo-Settlement Hypothesis: Evidence from Qa' Abu Tulayha West, Southern Jordan. *Preprint for the 5th International Conference of Archaeozoology of the Southwestern Asia and Adjacent Areas.*

■学会口頭発表

藤井純夫

- 1998 「肥沃な三日月弧の外側：カア・アブ・トレイハ西遺跡の第二次発掘調査」第6回西アジア遺跡発掘調査報告会(日本西アジア考古学会)
- 1999 「群れ単位の家畜化説：西アジア考古学との照合」第28回ホミニゼーション研究会(京都大学霊長類研究所)
- 1999 「肥沃な三日月弧の外側：カア・アブ・トレイハ西遺跡の第三次発掘調査」第7回西アジア遺跡発掘調査報告会(日本西アジア考古学会)
- 2000 「テント以前の遊牧民：カア・アブ・トレイハ西遺跡の発掘調査から」第11回日本沙漠学会学術大会
- 2000 The Pseudo-Settlement Hypothesis. The 5th International Conference of Archaeozoology of the Southwestern Asia and Adjacent Areas, Yarmouk University, Jordan.